
我らアーツ対策本部！！

ぞなむす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我らアーツ対策本部！！

【コード】

N0103M

【作者名】

ぞなむす

【あらすじ】

私達が住む世界とは少しだけ違う世界。

・アーツ・そんな存在が共に暮らす世界。

そんなアーツ達の引き起こす事件（災害）を取り締まるため、今日も彼らはノリとネタとギャグで働く！！

設定「世界観、語句」編（前書き）

どうもぞなむすです。

拙作「天界探訪記」を書いてるときに、唐突に書きたくまりました。思いつきで書いたので設定が雑+更新が不定期となります。それでもよろしければどうぞ！

設定「世界観、語句」編

世界観

武器等の技術の発展具合は現実世界と同じ。武器防具はアーツが存在しているため、多岐にわたって発展している。

アーツとは

正体不明の生物。エナジー（魔力とも）と呼ばれる力を内蔵している存在の総称。ヒューマンタイプ、ドッグタイプなど様々な生物に酷似した姿で存在している。そのくせすべてのアーツは人並みの知能を持つ。また、彼らには同族意識は存在しない。同じアーツだからといって何の感情も湧かない（個人的な友情愛情はあるが）。いつの間にか存在して当たり前のように馴染んで最期は普通の生き物と同じく死ぬ。つまりアーツが生まれる場面ははまだ観測されたことではないということ。

エナジーとは

アーツに備わっている力。魔力と呼ばれたりもする。エナジーを使うと不思議な現象を起こすことができる。起こせる現象は様々で、個体によって異なる。一般的に使うエナジーが多いほど異常な現象を起こすことができる。

アーツ対策本部とは

アーツは基本的に友好的な存在である。が、人間の中に犯罪者がいるように、害をなす存在もいる。そんなアーツ達を討伐するために作られたのがアーツ対策本部。エナジーを持つアーツ達は常人では対応できないので、特殊な訓練を受けた人間と少数のアーツ達で構成されている。身体能力が常人離れしているせいか、変人がやたらと多い。故に数少ない常識人が隊長に選ばれることが多い。

チームケルベロスとは

隊長、副隊長、ジョージ、トムソン、フレッド、ジヨナサンの6人で構成されたチーム。変人揃いの対策本部の中では常識人が多いと

評判のチームである。

随時更新します。

設定「世界観、語句」編（後書き）

よろしければ「天界探訪記」も覗いていってくださいと宣伝してみ
る。

設定「人物」編 7/03更新(前書き)

人物設定です。後から後から増えていきますので、ネタバレを防ぐため登場する話数で区切っています。この設定を読む人は、自身の読んだ話の前までで止めておいてください。

設定「人物」編 7/03更新

登場人物設定

ジョージ

気さくな青年。人生をノリで生きてるといつても過言ではない。赤の短髪、黒い吊り目、細マツチヨ、イケメン。武器は大剣。振り回すように扱う剣技を習得している。

フレッド

常に冷静を心がけている青年（実際は冷静を欠くことが多い）。ヒューマンタイプのアーツであり、エナジーを使うと水を操ることができる。自称紳士（周囲の評価は変態）。蒼のロング、赤の垂れ目、モヤシ、イケメン。武器はエナジーを使った水の弾丸。

トムソン

かわいい系の少年。名前と顔が一致しない度ナンバー1。茶色のふわふわセミロング、金色の垂れ目、細身で小柄。声変わりしていないし、するとも思われていないので、女の子扱いされることもしばしば。武器はレイピア。蝶のように舞い蜂のように刺す剣技を得意としている。

ジヨナサン

口数の少ない青年。喋るのは面倒だと思っているが、必要ならば長々と話すこともする。黒のロング（後ろで束ねている）、蒼の瞳（吊り目がちだがほとんどジョージほどではない）、細身で筋肉がついているようには見えない。武器は槍、都合上一本で戦うことが多いが、本当は二槍での戦いを得意としている。

副隊長

礼儀正しい女性。まじめ過ぎてからかわれることがしばしば。銀のロング、蒼の吊り目、スレンダー。武器は棒。棒術を得意としている。

隊長

品行方正な女性。良家のお嬢様。金のセミロング、金の垂れ目、小柄ながらも豊満なボディ。その容姿と性格から、内面でも外面でもファンが多い。ファンクラブができるほどの美形揃いなチームケルベロスの中でトップの会員数を誇る。武器は刀。すでに失われた流派らしいが、その動きはジョージいわく「台風」

第一・二話登場

サラ

エンジェルタイプのアーツ。おとなしくあまり喋りたがらない。美しい銀髪、眠そうな瞳、整った顔立ち。甘えたがりな性質を持っている。武器は宝珠、アーツが稀に持つ希少な鉱石で、エナジーを貯めておける。ちなみに武器といったが彼女自身は戦うわけではなく、回復を専門としている。（ただし、戦闘ができないわけではなく、光を操って刃を作り出すことができる）

ジャンヌ

副隊長のこと。

撫子

隊長のこと。読み方は「なでこ」である。「なでこ」では断じてない。

第一話「期待は失望を二乗する」(前書き)

どうもぞなむです。

記念すべき第一話、どうぞお楽しみください。

第一話「期待は失望を二乗する」

どかつ!!

「おいつ！状況はどうなってる!？」

「知りません！こつちだつて必死なんです!!」
「ばがんつ！」

「っ！トムソンがやられた!!」

「衛生兵！衛生兵!!」

どがあ!!

「エネルギーフィールド、出力低下！防衛陣、突破されます!!」

「……くそっ!!」

「冗談じゃねえぞこんな時に!!」

「文句言ってる暇があつたら手を動かしてください!!」
「ががががが!!」

「ぐあ!!」

「ジョナサン!？」

「すまない…後は頼む……」

「死ぬなよ！お前が死んでどうするんだ!？」

「……」

「うっ、うわああああああつあ~~~~!!!!!!」

ひゅ~~~~、ズガン!!

GAME OVER

「……これ無理ゲーだろ」

「おつかしいなあ、HARDモードまではそこまで難しくなかったのに」

「いやいやいやこれ明らかにレベル上げすぎだろ!!初っ端から敵兵に囲まれてるってどういう状況だゴラァ!!」

「いや、それ僕達に言われても……」

「さすがに厳しすぎましたね。チーム『クリムゾン』の中でも腕利

きのゲーマー4人でもクリアできないとは」

「いやいやいやこんな普通の人間はできねえよ。何考えてんだこのゲーム会社！」

「確かにねえ。いくらHELLモードでもこれはやりすぎだよ」

「クリアできるのは恐らく副長ぐらいでしょうか」

「だよなあ、っていうか副長でも怪しいし」

「そもそもあのゲームなんてやらないでしょ」

「お前わかってねえな！ああいったタイプが実はゲーマーでした！なんていう感じがいいんだろうが！」

「……それは女としてか？それともキャラとしてか？」

「キャラに決まってるんだろが！！あんな性格の女誰が好きになんだよ！あんなきつつい性格だから嫁の貰い手もいね」

メキヨ！！

「ぐああああああ！！！」

「誰が行き遅れですか、誰が！？」

4人の、いや一人死にかけてるので3人の視線が副隊長に集まる。

「何ですかその目は！私が行き遅れてるとでも言うのですか！？」

誰も否定も頷きもしない。

「違います！行き遅れてません！ただイイ男の人が見つからないだけですよ！！」

皆の目が生暖かい目になってくる。

「ああ、ちが、ちがう……………違うってばああああああ！！！」

ダダダダ！！

副長は泣きながら行ってしまった…………

「おいおい何泣かしてんだよ……………」

「…………俺たちは何もしてないぞ？」

「そうだね」

「そうですね」

…………

「……かしあれだな、いつも仕事ばかりでだるいけど、ないなら

ないでだるいな」

「結局どちらでもだるいんじゃないですか」

「……死ねばいい」

「いやいやいや何ぼそつと怖いこと言っただよよ!」

「あはは、ジョージは殺しても死なないから大丈夫だよ!」

「そんな不死身設定ねえよ!」

「ビーツ!!ビーツ!!」

「ほら、あなたがそんなこと言うから仕事が来ちゃったじゃないですか」

「いやいやいやそれ俺のせいじゃないだろ!」

『ポイント135 - 34にアーツ出現!タイプはヒューマン、特徴は……え?なんですか、それ?冗談ですよね?あ、エイプリルフールですか、ですよね!』

ちなみに今日は5月10日である。

『……嘘じゃないんですね。そうなんです。……はあ。特徴は『全裸』です。行けばすぐにわかると思います。がんばってください』

……

「なにい!?全裸だと!?!?けしからん、俺が直々に成敗してやる!」

「まあまあ落ち着きなさい。ここは捕獲 調教でしょう常識的に。このメンバーで調教に向いているのは私、この任務は私に任せなさい」

「フレッドは前線派じゃないでしょ。捕獲は僕に任せてよ」

「……待てお前ら。誰が女性型だと」

「いよつしゃああああああ!!!!いくぜオラァ!!」

「……」

彼らは一瞬でそれぞれの愛機に跨った。

「チームケルベロス、出動する!!」

『待ちなさい、あなた達!私と隊長がまだ……』

「発進!!」

ぎゅーん！！

そうして彼らは隊長と副長を置いてけぼりにして、任務に向ったのだ。

移動中……

ぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃ！！！！

「到着！！」

派手にドリフトをかましながら目的地に着いたチームケルベロス。

「さあ！けしからんアーツはどこだ！！」

「ふふふ……私の拷問は108までありますよ？」

「縄の準備はバッチリだよ！」

「……お前ら」

「どんな奴らだろうなあ。俺としては大和撫子みたいなのがいいなあ」

「私は雌犬タイプがいいですね」

「……今更だけどフレッドって変態だよな」

「ホント今更だな」

「お待ちなさい。誰が変態ですか！！？」

残り3人の視線が集まる。

「何か誤解しているようですが私は変態ではありません。たとえばそつだとしても、変態という名の紳士」

「言わせるかあ！！」

「ぼくずしゃばきっ！！」

ジョージの大剣の峰が頭に、トムソンのレイピアが腰に、ジョナサンの蹴りが脛にクリーンヒットした。

「危ない危ない。この小説はパクリネタ禁止だったのに」

「まあでも実際は使っても気づかないことや故意に使ってることがあるんだけどねw」

「……そういう作り手視点も禁止だ馬鹿ども」

閑話休題

「僕としてはお姉さんタイプがいいなあ」

「……」

「ん？ ジヨナサンは希望はないのか？」

「……いや、まだ女性型と決まった訳じゃ……」

「お、あっちにいるぞ！」

「え！？ ホント！？」

「早く行かねば！！！」

「そうですね！！！」

彼らはいつの間にか復活したフレッドとともに現場に向った。

だがしかし！！

「……」

「……」

「……」

「……」

そこにいたのは全裸のマツチヨだった！！

「おげえー」

「ああ（フラ、バタツ！）」

「H A H A H A、これは夢だよみんな夢なんだよ！！！」

「……だから言っただろう」

シヨックを受けるチームケルベロスの面々。最初から期待していなかったジヨナサンでさえも精神的ダメージを受けている。

おや？ アーツ達がこちらに気付いたようです。

「……お前らしっかりしろ！来るぞ！！！」

「おええ」

「うーん」

「H A H A H A H A」

ぬばおおお！！

奇怪な叫び声を上げて迫ってくるアーツ達。その数なんと20！
！もちろんすべて全裸！！

そのグロテスクな光景にジヨナサンを除くチームケルベロスのメンバーの精神は崩壊した！！

「……うわああああああ……！！！！」

「……逃げるな！！ちい！！」

（ここで私まで逃げだせば被害が拡大する……仕方ない、一人でやるか！！）

心の中では饒舌なジヨナサンが一人悲壮な決意を固め、全裸軍団（マツチヨ男達）に槍を向ける。

「……来い！！」

するとどうだろう！何を勘違いしたか全裸集団（何度でも言うがマツチヨ男達）は頬を染めてもじもじしているではないか！！

「……（怒）」

ズガアアアアン！！

ジヨナサンが放った槍の一撃は全裸軍団（マツチヨ！マツチヨ！）をまとめて吹っ飛ばした。

「……またつまらぬものを吹き飛ばしてしまった（泣）」

ジヨナサンは泣いた。人々を守るために鍛え続けた槍技が変態どもを吹き飛ばしたことに。

（……さて）

ジヨナサンの周りには変態の残骸が散らばるのみで、敵はおろか味方も現地住人すらもいない寂しい状況である。

「……あの」

「ん？」

そんなジヨナサンに話しかける少女が居た。美しい銀髪、眠そうな瞳、整った顔立ち。あと数年もすればとてつもない美人になるであろう。そして、彼女の背中には美しい純白の翼が生えていた。

「……エンジェルタイプのアーツか」

ジョナサンの呟きに少女は肩をビクツと震わせる。

(先ほど私がアーツ達を吹き飛ばしたのを見ていたのだろう)

ジョナサンはそう結論付けると。あることに気付いた。

(……何故に全裸……!?)

そう、彼女は一糸まとわぬ姿でジョナサンの前に立っていたのだ。

「……とりあえずこれを着ておけ」

そういつてジョナサンはチームケルベロスの制服の上着を着せてやった。同じチームの自称紳士とは違って本当の紳士である。

「……ありがとう」

もう五月とはいえ少し肌寒い今日この頃、いくらアーツといえども寒いものは寒いのである。

感謝の意を表した彼女の微笑みは、その手のことに全くといっていいほど興味のないジョナサンでさえ見惚れるほどであった。

(……さてどうするか、見たところ人に害をなすアーツではないし、こちらで保護するべきか……?)

そうやって思考に浸っていた彼は気付かなかった。

彼の真横から棒が飛んできていたのに。

どぐしやあ!!

「ぐはあ!」

「なに幼女に手を出しているのですかあなたは!! ジョナサン、あなたはチームケルベロスの中では私と隊長を除いて比較的まともな部類に入ると思っていたのに!!」

ボゴツ! ガスツ!

「あなたが……そんな人だったなんてえ!!」

メキ! ボキツ!

「心っ! 底っ! 見損ないました!!」

「ほらほら落ち着いて、副隊長殿。これ以上やるとジョナサンが死

んでしまうから」

「ジョナサンを滅多打ちにする副隊長の後ろから声がかかる。

「隊長、何を言っているのですか！こんな女性の敵は死んでしまっただほうがいいのです！」

「女性の敵かどうかは話を聞いてから判断しましょう。それよりもあなたは他のメンバーを集めてきてください」

「でもっ！」

「隊長命令です」

「……わかりました」

納得いかない顔で逃げだした3人を探しに行く副隊長を見送り、隊長はジョナサンに声をかけた。

「ジョナサン、大丈夫ですか？」

「……ええ、まあ、なんとか」

「それは良かった。では、簡易でいいですので報告してください」
「わかりました」

説明中……

「なるほど、件の全裸は討伐して、その後この少女が現れたと」

「簡単にいえばその通りです」

「ふむ」

隊長はじつと少女を見る。少女のほうは先ほどのバイオレンスな光景がショックなのか、ずっとジョナサンにしがみついている。

「確かに害意はなさそうですね。こちらで保護しても問題ないですよ」

「いえ、待ってください。一応彼女の同意をとらねば」

そう言ってジョナサンは少女に視線を移す。

「君が保護を望むなら私達は」

コクコクッ！

「……凄く懐かれていますね」

「言い終わる前に同意が得られるほどには」

「……決めました。彼女はあなたの預かりということにします」

「……待ってください」

「嫌なのですか？」

「そういう問題でなく」

「あなたに懐いていると言えば聞こえはいいですが、言い換えればあなた以外には懐いていないのです。そんな彼女をあなたから引き離すのは得策ではありません。懐いていない人間に対して敵対行動をとるかもしれないし、そもそも彼女の能力が分かりません。暴れられるとこちらに甚大な被害が及ぶかもしれません。ならばそういった危険ができるだけ少なくて済むようあなたのをそばに置いておくのが最良だと思いませんか？何よりこんな小さな子に寂しい思いをさせるおつもりですか？」

「……いえ、それはわかってはいるのですが」

「なら何が不満なのです？お給料も二人生活していくには十分なほど出ていますし、世間体もあなたのことですから心配ないでしょう」

「そこは心配なのですが大事なのはそこではなく」

「はつきりおっしゃってください。問題があれば解決してみせますから」

「私の周りには彼らがいます」

彼らとはいわずもがな、チームケルベロスのメンバーである。

「……（汗）」

「……」

「……大丈夫です！いくら彼らでも子供には手を出さないでしょう」

「……フレッドあたり怪しいのですが」

「……（滝汗）」

「……」

「……確かにフレッドの好みに入りそうですが大丈夫です！私が厳命しておきますから！……」

「……そもそもこの子の教育に悪影響が……」

「……（涙目）」

「だ、だいじょうぶです。かれらにはあわないようべつくかくにへやをよういしますから！」

「……私が寝泊まりしているのはチームケルベロスの集会場なのですが」

「……（泣）」

「じゃあ……じゃあ……」

「じゃあ……う……うえええええ〜ん!!」

ズガン!! いつの間にか戻ってきたジョージの蹴りが頭に直撃した。

「てめえジョナサンこの野郎! 何隊長泣かしてんだよ!!」

「本当です! 隊長を泣かすなんてあなたそれでも人ですか!？」

「隊長、大丈夫ですか? ジョナサンに何されたんですか? 僕でよければ相談に乗ります」

「あ、トムソン! 抜け駆けはゆるさねえぞ!」

「隊長! ジョナサン、あなた幼女だけでは飽きたらず隊長にまで!

! もう許しません! お天道様に代わって私が成敗してあげます」

「副隊長、ジョナサンを成敗するなら私の拷問7つ道具をお使いください!!」

「よしよし、隊長。もう大丈夫ですからね」

「隊長! 今度ジョナサンに何かされそうになったら俺に行ってくれ! 全力で守ってやるからよ!!」

「今思ったけどこの扱いの差はなんですか! ? あなた達は私より隊長のほうがいいというのですか! ?」

「そりゃ当_レぶべらっ!!」

「まあ当然dぐぴゃあー!!」

「……………(言っちゃだめだ、当然って言いたいけどいつちや駄mあべしっ……!!)」

「ああもわかりましたわかりましたよ!あなた達が私のことをどう思っているかはつきりわかりましたよ!!今度の訓練、覚えときなさい!!」

「は……………はひ」

「りよ、了解です……………」

「……………僕何も言っていないのに」

「トムソン、あなたは顔に出てましたよ?ええ、出てましたとも」

「り、理不尽だあ!それは被害妄想ですよ!!やっぱり自覚してるからそう思」

「そおい!!」

ゴン!!副隊長のジャーマンが決まったあ!!

「……………(魂が口から出ている)」

「……………南無」

「さて、あなた達はどうしてくれましょうか。やっぱり次の訓練なんて言わずに今処刑……………いえ私刑にしましょうか」

「言い直したのに内容変わってない!!そ、そんなことより副隊長!今はジヨナサンの処分が先決だと思います!!」

「……………それもそうですね。話を逸らされた感じが激しくするのですが、あなた達の処分は後回しにしましょう。では改めて……………ジヨナサン、申し開きはありますか?」

「……………隊長に事情を聞いてください」

「なっ!隊長に話させるつもりですか!??」

「てめえそこまで鬼畜だったのか!!」

「……………見損ないましたよ、本当に」

「大丈夫ですよ隊長、あなたの口からなんて言わせませんからね」

「……………お前ら何の話をしている?」

「あなたは隊長にひどいことをしておきながらそれを隊長に言わせ

るなんて鬼畜だと言っているのです!」

「……ひどいことは?」

「それは……公衆の面前で言えないアレです」

「……わかりました。あなたが何を勘違いしているのか」

「何が勘違いですか! そうやって今しかがたのことを誤魔化すつもりですか!？」

「……そんなことを無理やりすれば着衣に乱れが出るはずですよ。隊長にそれがありますか?」

「え……? いえ、ないですけど……」

「そもそもあなたが戻ってくるまでの短時間で何ができるといっているのですか」

「それは……えっと……」

「……ちゃんと確かめもせず一方的に私を悪者扱い……余程死にたいらしいな?」

「え、ちよつと、待ってください!」

「落ち着けて、今は冗談っていうかノリっていうか!」

「そうだよ、僕たちはジョナサンのこと信用してるから!」

「全くジョナサンはノリのわからない人ですね」

ブチッ

「……あ」「」「」

「お前らいつペン死にさせえ!!」

ズギヤーン!!

「……あゝれ〜!」「」「」

キラーン!

そうしてチームケルベロスの間々は星になったとき。

「隊長、そろそろ泣きやんでください」

「……ふえ?」

「私が別の区画に部屋を借りて、彼女と一緒に暮らします。それでいいですか?」

「え、あ、はい! そうしてください!……あれ? チームのみなさん

が戻ってきていたような気がしたんですが」

「……彼らは星になりました（般若顔）」

「そ、そうですか」

その後、ジヨナサンと隊長は少女を連れて帰った。星になった面々もなんとか帰ってこれたらしい。

第一話「期待は失望を二乗する」(後書き)

感想待ってます！

第二話「少女に懐かれるとロリコンと呼ばれる不思議」(前書き)

まさか第二話書くことになるとは……。

まあノリで書きちゃえばいいか！

もしろい玩具がいっぱいあるよ！」

「……私はこの人がいい」

そう言つて少女はジヨナサンの腰に抱き付いた。

「……ふむ」

「ふむじゃねえよこのロリコン！畜生、なんだってこんな不愛想男にー！」

「全くです！それは他の三人に比べたら幾分かましですが、チームケルベロスの問題児四人にこの子の保護者が務まるわけがない！！」
「……それは聞き捨てなりませんね。この私のどこが異常者だといふんです！」

「あなたが一番変態でしょうー！！」

「フレッド……自覚しなよ」

「何ですか揃いも揃って私をいじめて。でもなんでしょうこの感覚、すごく気持ちい「バキイー！！」ごふうー！！」

「仮にも子ども目の前でそのような危険発言はご遠慮ください」

「……隊長、フレッドの顔面が陥没してますが」

「問題ありません。彼はあれくらいではビクともしませんよ」

「いや、でもよう、隊長。フレッドの顔から出てはいけない汁まで垂れてるんだけど」

「え……？きやあ！フレッドさん、大丈夫ですか！！？」

「ねえ、ジヨナサン？」

少女が不思議そうな顔をしてこちらに話しかけてくる。

「ん、なんだ？」

「この人達つて変態さんなの？」

「……その考えは概ね間違っていない」

「……違うー！！」「」「」「」

「俺のどこが変態に見えるんだよー！！」

「私は紳士だといつも言ってるでしょうー！！」

「僕ほど純粋な子も珍しいよー！！」

「いつもまじめな私が変態なわけないでしょうー！！」

「わ、私も変態ではありませんよ!」

「……先ほどまでの自分たちを思い返してみる」

「「「「うっ……」「」「」

「この紳士たる私には変態要素はありませんね」

「()()(駄目だこいつ、早く何とかしないと……!)()()(

フレッドと少女以外の思考がシンクロした瞬間だった。

「……まあそれはおいといて、さっさと自己紹介すませちまおうぜ」

「……そうだな」

6人の視線が少女に集中する。

「……じゃあ自己紹介してくれるか?」

ジョナサンはその声に少女はコクリと頷いた。

「あ、あの……私は……その……」

ぷしゅ〜

少女は顔を真っ赤にしてうつむいてしまった。

「大丈夫か?無理はしなくていいぞ」

フレッドが優しく声をかける。そのことで多少気が楽になった少

女は

「私は、サ、サラといいます!エンジェルタイプのアーツです!どうかよろしくお願いします!」

と元気よく自己紹介を果たした。

「俺の名前はジョージってんだ!よろしくな!」

「私の名前はフレッドです。あなたと同じアーツです。まあヒュー-

マンタイプですがね」

「僕の名前はトムソンだよ。よろしくね!」

「私の名前はジャンヌです。チームケルベロスの副隊長をやっています。よろしくね?」

「私の名前は撫子といます。チームケルベロスの隊長をやっています。よろしくお願いしますね」

「そして私がジョナサンだ。よろしくな、サラ」

「……はい！」

頬を染めて浮かべるその笑顔は、まさに天使の笑顔と呼ぶにふさわしいものだった。

「……かわいい〜!!」「……」

「きゃっ……!」

「……はあ」

サラの盾となるその立ち位置で、ジヨナサンは深くため息を吐いた。

「で、その子どうすんだ？確か保護するって話だけど……」

「ええと、それはですね」

「私と一緒に暮らすことになった」

「……え……?」「……」

「それにあたって、今まではここの集会所で寝泊まりしていたが、アパートの一室を借りることになった。まだ決まっていないが、それまでは隊長の家で私ともども世話になることに「待て待て待て待て!」?なんだ?」

「いやいやいやいや『なんだ?』じゃねえよ馬鹿野郎!!今なんつった!?!」

「アパートに移ると「そういうことじゃねえよ!!」……だったらなんだ?」

「お前……隊長の家に世話になるって言わなかったか!?!」

「ん、ああ。宿が決まるまでの間サラをここで寝かせるわけにはいかないからな。だから隊長の家d「ゴシヤア!!」「ぐはあ!!」」

「てめえ一体どういうことだゴラア!!」

「そうですよ!あなたは一体何を考えているのですか!?!?」

「羨ましい妬ましい恨めしい死ねばいいのに……」(ブツブツ)

「な……な……」

「……何故殴る」

ドゴグシヤバキ!!

「『何故殴る』だとお？ 決まってんじゃねえか！！ 羨ましいんだよ
コンチクシヨウ！！」

「……ゴフ…… 何処がだ？ 他人の家に世話になるのはあまりいいこ
とじゃないぞ？ 精神的に休まらないからな」

「ああん？ それは自分の欲望が抑えられねえからか？ あんま調子乗
つてつと潰すぞオラ」

「超絶に朴念仁ですねあなたは。 その様子だと間違いは起きなさそ
うだからいいものの、やはり妬ましいことには変わりありませんね」
「（ブツブツ）」

「それでもいい歳した男女が一つ屋根の下で暮らすなんて許される
わけがありません！！」

「そうですね、そういう認識ですよ、やっぱり（ガックシ）」
「……訳がわからん」

と、サラが倒れている（無論、先程の私刑によるものである）ジ
ヨナサンに駆け寄ってきた。

「大丈夫？（ユサユサ）」

「……ああ、なんとかな。 少し休めば大丈夫だ」

「……私が治してあげる」

「え？」

キイイイイーン！！

澄んだ音とともにジヨナサンが光に包まれる。

「あ、あなた！ いったい何をしてるんですか！！？」

「ジヨナサン！ 大丈夫ですか！？ 大丈夫なら返事をしてください！
！」

そうこうしているうちに光が収束してくる。

「「ジヨナサン！！ 大丈夫ですか！？」」

「あ………はい」

「「「ちっ」「」」

露骨に舌打ちする3人。

「ホントに大丈夫ですか？ 痛いところありませんか？」

「我慢しないで言ってくださいね？」

「ええ……痛みが全くありません……さっき殴られた痛みまで消えています」

「……え？」「……」

「サラ、君が治してくれたのか？」

「うん」

満面の笑みを浮かべながらサラは頭を差し出してくる。ジヨナサンは一瞬意味がわからなかったが、直ぐに撫でてほしいのだと気付いた。

「ありがとう（なでなで）」

「えへへ〜」

にぱぱ〜

「ロリコンめ」

「ロリコンですね」

「ロリコン」

「ロリコン！」

「ロリコンですか……」

「……お前ら」

「それは置いておいて。治癒能力ですか、あまり聞いたことが無い能力ですね」

「そうですね。珍しい能力です」

その言葉に、ジヨナサンは不安を覚えた。

「……不味いでしょうか」

「……あんまりいいとは言えませんね。レアスキルを持つアーツは研究対象となるのが常ですから」

「……私もそうなるの？」

「安心してください、サラちゃん。チームケルベロスの隊長として、そういったことは絶対にさせませんから」

微笑みながら優しく諭す隊長。

「……ありがとう」

こうしてサラとチームケルベロスの面々の顔合わせが終わった。

第二話「少女に懐かれるとロリコンと呼ばれる不思議」(後書き)

今回戦闘シーンが無かった。ギャグ小説だからいいと思った。

でも戦闘シーンが無いと疾走感が足りなかった。

これからも爆走できるよう頑張りたい。

第三話「何故タコの足は八本で、イカの足は十本なのだろう」(前書き)

久々の投稿。三話目ができるという奇跡。

第三話「何故タコの足は八本で、イカの足は十本なのだろう」

『え〜緊急事態〜緊急事態〜ポイント134 - 35 . 5にアーツ出現〜。え〜とタイプは〜タコタイプだな〜。さ〜さっさととはたらく〜』

「今日の担当はライナスさんかあ。やる気なくなるな」

「まあまあそんなこと言わずに。行きますよ」

「今回のお仕事は私と副隊長を除いた4人で行ってきてください」

「え？なんで？」

「私達はこれからサラちゃんが無事安心して暮らせる環境を作らないといけない。ですので、今回は4人で向ってください。幸いそのままで凶暴なアーツではないそうですし」

「了解しました」

ジョージ達はいつものように自分達の愛機に跨り、出撃の合図を待つ。

『出撃メンバーの準備の完了を確認。では、出撃してください』

アナウンストともに格納庫の扉が開く。

「よっしゃあ！いくぜー！！」

そこから飛び出していくのは4機のバイク。その速度はグングン増していき、目的地に向けて駆け抜ける。

そうして移動すること10分程度。ジョージ達はポイント134

- 35 . 5に到着した。

「さ〜て、どこにいるのかね」

「ふむ、あちらのほうで騒ぎがありますね。とりあえず向ってみましょつ」

「タコタイプかあ。なんでオクトパスタイプっていわないんだろうね？」

「……食べられるのか？」

「いやいやいやいきなり何言いだすんだよ！？」

「一応警告はしたしな」

「というわけで」

「ジャキ！」

「……さようなら」「……」

「NOOOOOooooo!!」

フレッドの攻撃！タコに18のダメージ！

トムソンの攻撃！タコに21のダメージ！

フレッドの水の波動！タコに10のダメージ！

ジョナサンの攻撃！会心の一撃！タコに35のダメージ！

ピチューン！

タコは倒れた。経験値を23ゲット！お金を129円手に入れた！

「ただいま」

「おつかれさまです」

「今日は楽な相手だったよ。まあ衝撃的ではあったけど」

「何を言っているのです。アーツは大概個性的でしょう」

「……何故そこで私のほうを見るのです？」

「……自覚が無いのかお前は」

「ジョナサン。あなたとは一度話し合わなければならぬみたいですね」

「だが断る」

「何故に!？」

「まあまあ、人間少しくらい特徴的なほうがモテるって聞いたことがありますよ?」

「隊長、それはフォローしてないですね?そうなんですか?」

ズズズイ!

「え、私そんなつもりじゃ……」

「ハッ!?まさか今のは遠まわしな愛の告白!?素直になれない隊長が私に魅力があると伝えることで愛を伝えようとしてくれていたのですね!?あああ、すいません隊長!そんな事とは気付かず失礼

しました！！隊長、私もあなたのことを愛してM」

ドゴオ！！

「ぐふう！！」

「いっぺんマジでシニサラセ」

副隊長、お冠である。

「ははは……」

そして隊長、苦笑い。

「あゝまあそれは置いておくとして、サラの待遇はどうなったんですか？」

「それなら安心してください。彼女は概ね私達の希望通り扱われることになりました」

「お、よかったじゃん」

ジョージがジョナサンの肩をバシバシ叩く。

「いや、概ねということは、そうでない部分もあったということでは？」

「……さすが、ジョナサンは鋭いですね。ええ、あなたの言うとおり、完全にこちらの希望通りとはいきませんでした」

「そうなの？」

「ええ。当初の予定ではマンションが見つかるまで私の家で二人の面倒をみるはずでしたが、若い男女が同じ屋根の下で暮らすのはどうかと言われましたので、副隊長の家で面倒を見てもらうことになりました」

「……むしろそれでいい！！上層部GJ！！」「」

「……若い男女が同じ屋根の下で暮らすのはどうかと言いつつ、私と暮らすのが許容されるのは何故でしょうかねえ（ヒクヒク）」

「それはあれだよ、副隊長が上層部に女として見られていないか」「バキッ！」

「ぐぎやあああああ！！」

「殴りますよ？」

「もう殴ってますがね」

第三話「何故タコの足は八本で、イカの足は十本なのだろう」(後書き)

次回予告

「出現！？ゴールくん！」の巻

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0103m/>

我らアーツ対策本部！！

2010年10月8日13時48分発行